

# 花の香り（夏-2）

中村祥二（会長）

## 1. ムスクの香りを持つという

バラの *Rosa moschata*（ロサ モスカータ）

ムスク（麝香）は中央アジアの山岳地帯に生息する雄の麝香鹿の香囊（こうのう）から得られる。中国最古の薬物書『神農本草経』によると、365種類の生薬のうち朝鮮人參、杜仲茶とならび最高のものとされる。強心、鎮静、鎮痙効果がある。その香りは少量を用いても、コク、幅、温かさ、女らしさなどを与え、遠くへと広がる。



ロサ モスカータ  
(*R. moschata* La Mortola)

*Rosa moschata*の枝変わりである *R. moschata* La Mortolaは白色5弁の花と楕円を長くした披針形のマットな葉をもつ美しいバラである。

5月の下旬、佐倉草ぶえの丘バラ園で改めて、これらのバラを嗅いでみると、クローブとアルデヒドがよく調和した強い甘さのある心地よい香りがした。ムスクらしい香りは格別感じなかった。そして、その後の分析によってもムスク化合物はまったく検出されなかった。

強く快い香りを持つ農産物や植物を日常的にムスクあるいは麝香の名称を冠して呼ぶことがある。例えばマスクメロンのマスクとはムスクのことであり、温室栽培品の香りと甘味の優れた最高級品指す。お米らしい強い香りを持つ米を麝香米と名

付けている。普通のお米に少量混ぜて焚くと新米の香りが部屋いっぱいに広がる。薬効的なさわやかさの強い香りのハーブのタイムは立麝香草という。

これらがムスクの香りや成分を持っているわけではない。ムスクローズも同様で、クローブとアルデヒドの特徴をもつ強い芳香のバラを表していると解釈できる。「ムスク」という冠は優れた香りと強さの印である。

余談になるが、La Mortolaの葉は子ねずみの背中をなぞった時のような柔らかくマットな感じがすると、世界の野生バラに詳しい千葉県立中央博物館主任上席研究員の御巫由紀さんに教えていただいた。

## 2. *Epicattleya* Kyoguchi

（エピカトレヤ Kyoguchi）

—ムスクが薫るラン

1996年東京ドーム「世界らん展日本大賞」に出展された *Epc. Kyoguchi* ‘Happy Field’は、たくさんの黄色い花をつけ、フレッシュな花の香りの中に拡散性の強いパウダリーでソフトな女性的なムスク様の香りを放っていた。作者の大西明さんを播但線京口近くの加古川のお宅に訪ねた。



エピカトレヤ Kyoguchi  
(*Epc. Kyoguchi* ‘Happy Field’)

この花の成分の研究から二種類の珍しいムスク様香気成分が見つかった。このランを作出した大西さんが、この花の香りを「中山太陽堂のクラブ化粧品の化粧水の香りがした」と表現していたのも分析の手がかりになった。

香りは交配に用いた片方の親の中南米原種の着生ラン *Epidendrum aromaticum* (エピデンドウルム アロマティクム) から由来していることが分かった。興味あることに親よりも子供の *Epc. Kyoguchi* の方がムスクの香りが強く出ている。普通あまりないことらしい。分析結果を精査すると Indole が香りを強めていることが分かった。*Kyoguchi* は近くを走っている播但線の姫路から一つ目の駅名「京口」からとっているという。

別の育種家の個体も含めて ‘Moon Powder’ ‘Star Children’ ‘Nishimino’ などの個体名がつけられていて、花容やムスクの強さが少しずつ違う。

この成分はムスク様香気を持つ大環状ラク톤の 16-Hexadecanolide、Hexadec-7-en-16-olide (Ambrettolide) であることがわかった。アンブレットの種子やアンゲリカの根はムスク様香気を持っているが、ラン科ばかりでなく花の世界からムスク化合物が見つかったのは初めてのことである。ムスクの香りを知らない人はこの花を嗅ぐとよい。それは、ムスクの香りを嗅覚的に理解できるからだ。2016年度の東京ドーム世界らん展日本大賞のフレグランス部門では *Epc. Kyoguchi* ‘Happy Field’ が最高の部門賞を獲得したのは嬉しいことである。

大西明さんは更に *Epc. Kyoguchi* を *Epi. aromaticum* にかけて戻し、よりムスク香の強い *Epc. Beau Sillage* ‘Tomoko’ を作出している。私の家にもこの同じ一株がある。*Kyoguchi* よりもムスクの香りが高いように感じる。

### 3. 春寒蘭の香りを放つ *Boronia megastigma* (ボロニア メガスティグマ)

春寒蘭‘頌春’は報才蘭(主香気成分:  $\beta$ -ionone) と寒蘭(主香気成分: methyl epi-jasmonate) の血を引く極めて優れた香りを持っている。東京ドーム

の「世界らん展日本大賞」の香り審査にもよく出展される。スズランとジャスミンの香りにレモン様の清々しさとスマイレ様の甘い特徴を持った拡散性の強い香りである。



ボロニア メガスティグマ  
(*Boronia megastigma*)

この香りによく似た花があったのだ。ニュージーランド・オークランドの世界らん会議のあとの南島のクライストチャーチにある知人の家を訪ねた折りだった。庭で夕暮れに見かけた小さな花が驚くような芳香を放っていた。*B. megastigma* である。花卉の内側が、黄色で、外側は暗紫色であった。花の大きさは私の手の親指の爪程の大きさであった。日本の園芸店で *Boronia* を見かけることはあるが、*B. megastigma* を見かけたことはない。この株をどうにか手に入れたいと算段したがどうしても見つけることができなかった。

ところが、数年経ってこの花はオーストラリア東南のタスマニア島で、栽培され香料も採油されていることが分かった。日本に来たタスマニアの香料会社の技術者の持参した分析表によると香りの成分は  $\beta$ -ionone と methyl epi-jasmonate だった。

### 4. クロウブ：地球が丸いことを実証した香り

インドネシアのバリ島でクロウブの木を見た時は感激した。クロウブというとスパイスのビンに詰まっていたり、ポプリのオレンジの果実の回りに刺さっていたりするような焦げ茶色の釘様のものではあった。

島の霊峰アグン山の帰り道、幸運にも道路わき

にここでつぼみを付けた木を見つけた。つぼみは浅い緑に先端が淡いピンクで、手にとって顔を近づけると優しい甘い香りにクローブの特徴が感じられた。この花の香りは東南アジアにいかなければ嗅ぐことができないのかといつも思っていたが、実は、思いがけない身近なところにあることに気づいた。国際香りと文化の会の見学会で星薬科大学の薬用植物園訪問の折、日当たりの良い一角に鉢植えのクローブがあるのを見つけた。なんと花をつけているではないか。ここまでくれば、遠くまで行かなくてもクローブの花香を嗅ぐことができるのだ。

この匂いは、子供の頃に近所の歯科医院に行ったときのおいを思い出す。最近通う歯科医院では全く感じたことがないのは、医療技術の進歩があったためと考えてよいのだろう。クローブは非常に殺菌力の強い薬だったという記憶が強く残っている。



クローブ

(*Syzygium aromaticum*)

このスパイスがどれほど人々の心をかき立て、大洋に乗り出させ、幾多の困難を乗り越えて東洋の辺境の島へと向かわせたことだろう。

バスコ・ダ・ガマがインド航路に旅立ったポルトガルの船出の地、リスボンのテージョ河畔に記念碑がある。エンリケ航海王子没後 500 年の 1960 年に建てられた巨大な帆船をかたどった発見記念碑である。その白い記念碑の前で、ここから船出したいにしえの冒険者達のことを思うと、深い感慨が胸にこみ上げてくるのだった。

スパイスは 15 世紀のヨーロッパの人びとの食品に香りづけ、味つけを行い、食欲を増進させ、また防腐、防黴(ばい)効果、駆虫、健胃などの医薬用として、刺激剤、強壯剤として欠かせないものであった。クローブに媚薬効果があることにも気づいた。嗜好品以上の存在で、人びとの生命を維持し健康を増進するための必需品となっていた。

当時、ヨーロッパでは東方の産物、とくに香料に対する需要が高まった。しかしその代価として輸出する商品は金、銀、銅などに限定されており、そのため西ヨーロッパは深刻な経済的不況に陥った。一方、中継地のマレー半島のマラッカとイタリアの代表的な東方との貿易都市であったベニスはその交易で莫大な利益を上げていた。

16 世紀のヨーロッパ人の東洋進出の目的は、インド、スマトラ、ジャワのペッパー、スリランカのシナモン、モルッカ諸島とバンダ諸島のクローブ、ナツメグを自らの手で獲得することであった。15 世紀からのいわゆる大航海時代には、ヨーロッパ列強の東方進出、植民地争奪戦争などの事件が相次ぎ、世界史を揺り動かす原動力になった。

1479 年のアルカソバス条約にもとづきスペインは大西洋を西進するという将来の方向性が決まった。スペインは西回りでモルッカ諸島に到達しようと考えた。そして 1519 年に本国を出発したマゼランの船隊は大西洋からホーン岬を回って太平洋に出て、マゼラン自身は途中で亡くなったが、船隊は 1521 年にモルッカ諸島に到着した。そして、さらに未知の太平洋を横断し、1522 年初めて世界一周を成しとげたのである。地球が丸いことの発見である。言語に絶する困苦が重なり合った大胆きわまる航海であった。「世界は丸い」と古代ギリシャ時代から信じられていたことを実際に証明したのがマゼランの船隊であった。

16 世紀ヨーロッパの東方アジアと西方アメリカへの航海は、実に南アジアのスパイスを求めて展開されたのである。南アジアのスパイスが、今日の世界の歴史を形成した一つの主要な契機となり世界的規模の交易が広がり、同時に文明も伝播することになったのである。